小学校教育における動物飼育といのちの教育

立川奏枝*・田中理絵**

Animal Breeding and Education of Life, in Grade School Teaching

Kanae TACHIKAWA, Rie TANAKA

(Received September 25, 2009)

Ⅰ．研究の目的

近年、子どもを取り巻く環境が変化し、青少年の犯罪の劣悪化・低年齢化や人間関係の希薄化など、多方面で問題が生じている。例えば、2004年の長崎県佐世保市で小学６年生の女子児童の同級生刺殺事件、2006年の文部科学省へ自殺予告手紙が送られたいじめ問題など、記憶に新しい。このような社会風潮のなかで、子どもたちのいのちの捉え方も変わってきているのかもしれない。そして今、そのことを受け、より一層の「いのちの教育」の大切さが、全国的に唱えられている。改正教育基本法には、第２条教育の目標に「豊かな情操、道徳心を培うこと」が明記されている。教育基本法の改正を受けて改訂された新学習指導要領では、学校教育において道徳教育が重要であると位置づけられ、さらに、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことがますます叫ばれた。あらゆることに感動し、他人を思いやり、命を大切にするような道徳性の形成である「こころの教育」が、学校教育現場にて求められているのである。

そこで著者が注目したのが、小学校教育における動物飼育である。動物との触れ合いは、生命尊重の心、動物理解、自然との共生意識のなど様々な役割を果たすものであり、子どもたちの感性や責任感、生きていく上で必要な感覚を芽生えさせることが可能であろう。現在、飼育小屋はほとんどの小学校に設置されている。しかし、その飼育小屋という教育的効果が期待される教材を、小学校では十分に活かすことができているのであろうか。

これらをふまえ、本稿では、小学校教育における動物飼育の目的のひとつである「いのちの教育」の研究を行う。特に、学校においてタブー視されている「死」に焦点を絞り、「いのちの教育」として学校教育での動物飼育のあり方を検討することが研究の目的である。

なお、この研究で実施した調査は、山口県すべての公立小学校を対象とした。山口県では現在「山口県教育ビジョン第２期重点プロジェクト促進計画」で道徳教育と体験活動の一体的な取り組みや「豊かな心」などの「心の教育」等を県が充実したいと提言している。その「心の教育」として、動物飼育は大きく貢献できるものである。日本獣医師会から平成19年８月には、「子どもの心を育てる学校での動物飼育」として学校動物飼育の具体的な今後の体制について提言、報告された。全国的に学校動物飼育活動の充実と促進が図られ、注目され始めていると言えよう。したがって、今回山口県の学校動物飼育について研究することで、その成果を山口県での教育に寄与していきたいと考えている。

＊山口市立佐山小学校　　＊＊山口大学

また、動物飼育教育の研究、さらには動物飼育に関する全県調査は、全国的に多くはされていない。したがって、山口県の調査ではあるが、数少ない動物教育の研究として全国にも通用するような調査・研究を見通している。

Ⅱ．先行研究

新聞記事を調べていると「動物飼育、でも『触れないで』」「情操に逆効果」（沖縄タイムス、H18／12／22）という文字が著者の目に飛び込んできた。沖縄県獣医師会の永井良夫学校飼育動物対策委員長が、第１回県学校飼育動物シンポジウムで、アンケート調査で明らかとなった現状を報告、学校飼育の問題を提起した内容が掲載されていた。実施されたアンケート調査は、沖縄県すべての小学校を対象としており、平成19年の段階では学校飼育動物の全県実態調査は初めての試みであったそうだ。

この調査では、動物を飼育している学校が85％に及び、飼育する目的としては「情操教育」が約95％、次いで「教材」が約40％と多かった。学校飼育は心の教育として考えられていることが分かる。しかし動物飼育の実態として、学校教育において十分に機能していないことも明らかとなっている。動物と児童が触れ合う場所や時間を設けている学校は45％と半数に満たない。児童の衛生面を心配して動物に触れさせていない例もあるそうだ。土日祝日の対応では「世話をしない」が44％に達したほか、数十羽のウサギがいる学校が複数あるなど、劣悪な環境がうかがえる調査結果であった。その他に、予算不足や動物の病気、死亡時の対応、無秩序な繁殖など多くの問題に困っている意見が寄せられている。この調査により、85％もの学校が情操教育を目的にしているにも関わらず、実際に活用されている様子は受け取れなかった。「子どもが愛情を感じない飼い方は、逆効果になる恐れがある。」と獣医師会は危惧している。

けれども、動物を飼育することが、子どもに良い影響を与えることは、数々の実践や研究によって明らかになっている。動物飼育を教育活動として学校で取り組んでいる実践報告では、どの先生方も「優しさや思いやり、責任感、いのちの重み」など子どもたちが真剣に動物とかかわるなかで成長する姿を実感していることが述べられている。動物を飼育することが、児童に良い影響を与えたこと示す研究では、中川などの調査がある（鳩貝・中川、2003）。適切な動物飼育が行われれば、十分な情操教育として有用なのである。

これらの先行研究を踏まえて、本研究では、動物飼育の現状を明らかにするために、アンケート調査を実施した。山口県では、動物飼育に関する先立つ研究はされていなかったこと、さらには、全国の動物飼育の研究においても県規模での調査はあまり実施されていないことから、県及び全国の動物飼育教育に寄与する意味で全県調査を行う。調査票の作成にあたっては、先行研究で取り上げた、沖縄県獣医師会のアンケート、中川の２つの調査、加えて鳩貝太郎が平成13年に行った飼育動物に関する調査（鳩貝、2001）を参考にした。本調査では、山口県の動物飼育の状況を把握することができている。本稿では、それらのデータをもとに、教育の場である小学校で動物飼育がどのような目的で行われているのか明らかにする。そして「いのちの教育」に有効であることを主張し、「鶏を殺して食べる」実践に対する学校側の意見を中心に、現在の「いのちの教育」のあり方を見つめ直す。

ところで、社会的にも重要視され、動物飼育が大きな役割を果たすとしている「いのちの教育」だが、本研究を進めるにあたり、この「いのち」の表記について一言加えておく。漢字の「命」や「生命」が身体的な生や死を示すのに対し、ひらがなの「いのち」は、一般的により広義な意味を指す場合使われている。身体的だけでなく、精神的、社会的な側面も含め、生き

ていく上でのありとあらゆるかかわり合いなど、広い概念で捉えることができる。本研究では、「命」「生命」ではなく、「いのち」として広い概念で考えているため、文献や調査の回答からの引用時を除き、「いのち」の語を用いることとする。

Ⅲ．本研究の調査概要及び分析方法

1　調査概要

本研究では、山口県における小学校教育での動物飼育の現状を明らかとする必要がある。そのため、山口県内すべての公立小学校(330校／平成20年４月１日の段階で休校中の学校を除く)に対して郵送法による自記式質問紙調査（「動物飼育に関するアンケート」全50項目）を実施した。調査時期は、平成20年８月12日～平成20年10月９日である。

アンケートは配布した330校中218校の回収を得ることができた（回収率66.06％）。そのうち有効回答数は217校である。回答者の属性を、以下の表１－１、表１－２に示す。

なお、調査を実施するにあたり、山口県内20市町教育委員会中、17市町の教育委員会より調査について承認を頂いた。その中でも、一部市町の教育委員会からは、ご厚意により直接該当校区の小学校に調査依頼の声をかけて下さる等の深いご協力のもと調査を実施することができた。

表１－１　質問紙調査票回答者属性（年代、性別）　（人）

年　代	20代	30代	40代	50代	60代	性別別合計	不明
男	3	10	43	33	1	90	3
女	20	19	36	50	0	125	
年代別合計	23	29	79	83	1	215	3
総　計	218						

表１－２　質問紙調査票回答者属性（役職）　（人）

	校長	教頭	飼育委員担当･飼育学年主任	理科教育担当教諭	道徳教育推進教師	飼育に携わっていない教諭	その他	不明	合計
人数	9	32	136	19	5	4	9	4	218
%	4.1	14.7	62.4	8.7	2.3	1.8	4.1	1.8	100.0

2　分析方法

まず、「いのちの教育」の研究を行うにあたり、小学校では動物飼育がどのような目的で行われているのか「こころの教育」「いのちの教育」に注目しながら、３つの観点で教職員の動物飼育に対する目的意識を分析する。第一に、「動物飼育をしている学校」を対象に、どのような目的意識をもって取り組んでいるのかを明らかにする。第二に、動物飼育をしている学校と動物飼育をしていない学校の両者（以下、「すべての学校」という。）を対象に、学校教育全体での動物飼育に関する目的意識を分析し、第一の結果を含め考察する。最後に、「すべての学校」を対象に、「動物飼育をしている学校」と「動物飼育をしていない学校」を独立変数に、「学校における動物飼育の種類」を従属変数におき、クロス分析をすることで両者間の意識に

違いがあるのか、比較する。このとき、「学校における動物飼育の種類」は、「愛情飼育」「いのちの飼育」「理科飼育」「展示飼育」「家畜飼育」「レンタル飼育」の６つに分類した。この分類の仕方については、中川美穂子が管理するホームページ「学校飼育動物を考えるページ」を参考としている。しかし、６つの中の「いのちの教育」のみは著者が追加した項目である。追加した意図として、学校では「愛情飼育」のうち、特に「いのちの教育」的側面が強調されるのではないかと考えたところがある。より意識が高いものを選出してもらうため、２つまで回答を可能とした。

次に、13つの質問項目からなる「動物飼育を経験した子どもの変化」から、子どもへの影響を示し、動物飼育の教育的効果を分析する。

そして、これら動物飼育の目的・意義を考察した上で、いのちの大切さを学ぶ授業として、「鶏を育てて大きくなったら殺して食べる」実践を例に、学校における「死」の捉え方に着目しながら、「いのちの教育」として動物飼育のあり方を検討する。

以上、アンケート調査で明らかとなったデータをもとしたSPSSによる統計的分析である。また、より現場に即した調査結果にするため、選択式の回答に合わせ記述回答も採択した。

なお、調査対象となった動物は、中川の研究結果を参考に、児童への影響が大きいとされたウサギ、ハムスター、モルモット、愛玩鳥、といった動物を指定した。実際に、調査票に明記した留意点をそのまま示しておく。

> アンケート中に出てくる「動物」とは、一般的に小動物と言われるものです。また、犬や馬など必ずしも小さくない動物を飼育されている場合も対象と致します。
> ただし、昆虫や魚介類（青虫、メダカ、ザリガニなど）は対象外とさせていただきます。

Ⅳ．分析結果

１　教育としての動物飼育の目的

学校では「動物飼育」をすることをどのように捉えているのであろうか。これから教職員の動物飼育に対する目的意識を明らかにする。

はじめに、学校として「動物飼育をしている学校」では、どのような目的意識を持っているのかを分析する。「あなたの学校での主な学校飼育の目的（なぜ飼っているのか）を教えてください」と尋ねたところ、得られた回答は表２の通りであった。

表２　動物飼育への目的意識（重複回答）

質問	回　答	学校数(151校中)	%
現在、あなたの学校での、主な学校飼育の目的を教えて下さい。	教材として	12	7.9
	以前から飼われているから	77	51.0
	鑑賞、愛玩	8	5.3
	情操教育（心、いのちの教育）	101	66.9
	アニマルセラピー	3	2.0
	その他	1	0.7

最も回答数を得られたのは「情操教育（心、いのちの教育）」101校で、割合は66.9％である。7割近くの学校で、情操教育の効果があると意識していることがわかる。しかし、「教材として」と答えた学校は1割に満たない。そして、さらに注目したいのは、「以前から飼われているから」の割合である。151校中77校が回答しており、5割にも及んでいる。半数以上の小学校において、動物飼育に対する目的意識は低く、ただ、これまでの継続として動物を飼っているという状態があると言えよう。学校で動物を飼育することに、情操教育という目的を十分に感じながらも、原因は様々にあるだろうが、実際には、児童への教育へ活かせていない現状にあるのではないだろうか。ここに学校での動物飼育教育の曖昧さが示されていることを現実として指摘しておきたい。

表3　学校における動物飼育の分類（複数回答）

	学校数 (215校中)	割合	補　足　説　明
愛情飼育	175	81.4%	人と動物が親しみ合う、情を通わす
いのちの飼育	142	66.0%	愛情飼育のうち、特にいのちに注目
理科飼育	50	23.3%	理科過程に組み込まれているもの
展示飼育	13	6.0%	鑑賞用として展示されているもの
家畜飼育	4	1.9%	家畜として飼育するもの

次に、動物飼育の有無に関わらず、教育として動物飼育はどのように考えられているのかを調べるために、「すべての学校」を対象に次の質問を行った。先の質問が「実際の飼育の目的」であるとすれば、ここでは「飼育教育の目的」をみる。質問は、「学校で飼育される動物は、次のどの種類に分けられると思いますか？」である。

上の表3から、大半の学校では学校の動物飼育は「愛情飼育」であると考えていることが分かる。そして、「いのちの飼育」と66.0％が答えていることから、多くの学校で、動物とのかかわりを通して生命の大切さを教えられると捉えているようだ。その他、「理科飼育」には、23.3％の学校が答えている。「展示飼育（6.0％）」「家畜飼育（1.9％）」もわずかであるが存在した。「一定期間動物を学校に委託し、育て、そのあと業者に返す」という「レンタル飼育」に関しては該当する学校は無かった。この結果は、回答者の個人的な思考が含まれるため、学校における動物飼育が必ずしもこの目的で行われていると断定することはできない。むしろ、愛情や理科、展示などいくつもの目的が重なりあっているのが現実であろう。また、小学校学習指導要領には、理科の学習目標・内容に動物とのかかわりが記されているにも関わらず、「理科飼育」に丸をつける学校が少ないのは、意外な結果であった。それは今回の調査で、理科教育で扱われやすい昆虫や魚類を調査対象から外したことも関係があるかもしれない。しかしながら、そのような中でも調査結果として「愛情飼育」、「いのちの飼育」を選ぶ回答者が多いという事実は、学校において「愛情」「いのち」という「情操教育」の観点で動物飼育を行う志向にあることを示している。

最後に、「動物飼育している学校」と「動物飼育していない学校」の間で飼育の捉え方に違いがあるだろうと考えた。小学校において「動物飼育の有無」と5つの項目（「レンタル飼育」は除く）のクロス分析を行ったところ、新たな事実がみつかった（表4）。「動物飼育の有無」

表４　飼育の有無と動物飼育の分類意識　　（上段：度数　下段：%）

		学校で飼育される動物は、次のどの種類に分けられると思いますか								
		愛情飼育			いのちの飼育			理科飼育		
		あてはまる	あてはまらない	合計	あてはまる	あてはまらない	合計	あてはまる	あてはまらない	合計
現在、学校として動物を飼育されていますか。	はい	133	19	152	97	55	152	22	130	152
		87.5	12.5	100.0	63.8	36.2	100.0	14.5	85.5	100.0
	いいえ	42	21	63	45	18	63	28	35	63
		66.7	33.3	100.0	71.4	28.6	100.0	44.4	55.6	100.0
	全体	175	40	215	142	73	215	50	165	215
		81.4	18.6	100.0	66.0	34.0	100.0	23.3	76.7	100.0
		χ^2=12.766、df＝1 ***p＝.000			N.S.			χ^2=22.416、df＝1 ***p＝.000		

と有意差が認められたのは「愛情飼育」「理科飼育」の２つである。「動物飼育をしている学校」では「愛情飼育」に「あてはまる」(87.5%)、「理科飼育」に「あてはまらない」(85.5%) と答える傾向がはっきりと表れた。反対に「動物飼育をしていない学校」では、「愛情飼育」に「あてはまらない」(33.3%)、「理科飼育」に「あてはまる」(44.4%) と答える割合が、「動物飼育をしている学校」と比べ、増加している。その差は、「愛情飼育」で２割、「理科飼育」で４割にも及んでいる。このことから、学校で動物を飼育し、触れ合っていると、飼育していない学校と比べ、より生き物に対して愛情を抱く。そして、飼育をしていない学校では、学校の理科カリキュラムの一環として動物飼育を捉えがちであることが言える。さらに本調査の他質問のクロス分析で「動物飼育していない学校ほど教室で魚を飼っている」(χ^2=11.188、df＝1、p＝001) ことが明らかとなっており、動物飼育をしていない学校では、理科飼育としての認識が強いことが分かる。

一方、今回「いのちの飼育」では有意な差はみられなかったが、「動物飼育の有無」に関わらず、「あてはまる」が互いに６割以上と高い割合となっている。飼育をしていない学校でも「いのちの飼育」として認識されていることが明らかとなった。表３の分析で、すべての学校で動物飼育は「いのち」という観点で行う志向があると述べたが、そのことをさらに裏付ける分析結果である。

以上３つの分析から、学校現場では、「動物飼育をしている学校」ほど「愛情飼育」という目的意識を高くもっていることが明らかとなった。反対に「動物飼育をしていない学校」では、「理科飼育」という受け止め方をする傾向にあるようだ。けれども、全体的にみて、「愛情飼育」「いのちの飼育」という意識を動物飼育に対して抱いていることがわかる。このように現在の学校では、子どもたちに「愛情」「いのち」について教え、育ませることができると考えているようである。

２　動物飼育と子どもの変化

動物飼育には、いのちを思いやり、大切にする心の教育となったり、責任感を培ったり、様々

な効果を示してくれるものであると言われている。そこで本研究でも、動物飼育をすることでどのような子どもの変化がみられるか分析することで、動物飼育の効果を検証し、動物飼育を行う意義を強めておきたい。

表5　動物飼育を経験した子どもの変化

	度数(校)	%
①　動物を可愛がるようになった	88	96.7
②　責任感をもって育てているようだ	79	86.8
③　いのちを大切にするようになった	82	90.1
④　動物に関する知識が増えた	69	75.8
⑤　いろいろな動物のことに関心を持つようになった	55	60.4
⑥　自然と関わろうとするようになった	54	60.0
⑦　児童の気持ちがやすらいでいるようだ	73	80.2
⑧　明るく活発になった	36	39.6
⑨　友達との仲がよくなった	28	31.1
⑩　動物の話題をよくするようになった	56	61.5
⑪　あまり動物に近づかなくなった	3	3.3
⑫　動物を乱暴に扱うようになった	3	3.3
⑬　児童間でのケンカが増えた	3	3.3

動物飼育を行っている64.7%の学校から、動物飼育を経験して子どもに何らかの変化が起こったという回答を得た。具体的な変化の様子についての質問項目は表5の①から⑬の通りである。

教職員が感じた子どもの変化として、高い数値を示したのは「①動物をかわいがるようになった」96.7%、「②責任感をもって育てているようだ」86.8%、「③いのちを大切にするようになった」90.1%、「④動物に関する知識が増えた」75.8%、「⑦児童の気持ちがやすらいでいるようだ」80.2%である。「①動物をかわいがるようになった」はその割合がほぼ100%と、かなり高い。動物飼育をすることでの得られる影響として、「動物をかわいがる」という、親しみや慈しみといった心を育てられると明言できる調査結果であろう。そして、「③いのちを大切にするようになった」も9割を示しており、生命尊重の精神を育てるのにとても貢献的である。また、責任感や心の癒しという点で効果的であると、飼育に携わっている教職員は感じているようである。さらに、「④動物に関する知識が増えた」という知的な側面や「⑤いろいろな動物のことに関心をもつようになった」、「⑥自然と関わろうとするようになった」にみられる興味・関心の面でも子どもに影響を与えていると考えられていることが分かる。この④、⑤、⑥の結果からは、動物飼育を基準として、発展的に視野が広まっていることも言える。逆に、影響が少ないとされるのは「⑧明るく活発になった」、「⑨友達との仲がよくなった」という児童の性格や交友関係面である。しかし、「⑩動物の話題をよくするようになった」は交友もしくは人間関係によるもので、ひとつのコミュニケーション方法になっていることがわかる。このことから、動物飼育に直接的に関係しないもの（⑧、⑨）は、変化としてあまり認められないよう

であるが、直接的なことは子どもに変化を与えるようである。

反面、表５の⑪、⑫、⑬に表れるような飼育に消極的効果を示す項目に該当する学校の数は、かなり少ないが存在することがわかる。自由回答欄には「動物をおもちゃのように扱う」「オスとメスを交尾させようとする」といった記入もあった。動物飼育を経験して、変化が得られなかった学校が35.3％あることも考慮すると、飼育の取り組み方によっては、効果を示さなかったり、逆効果になってしまったりすることがあり得ると言える。

以上、示した結果は、教職員の目からみた子どもの変化である。そのため、どのような効果が動物を飼育することで子どもに内在化されているのかは、はっきりとわからない。加えて、飼育する前と飼育をした後や、統制群をつくって比較した調査ではないので、変化としてとらえにくい部分もあることが想定される。実際に「ずっと飼っているので変化がよくわからない」という意見もあった。けれども、表５のように変化として捉えられる効果があることも事実である。表５から、動物飼育は、親しみ慈しみ、生命尊重、責任感といった心の育成や児童の心を癒したり、知識の獲得、興味・関心の幅の拡張をしたり、さらには、コミュニケーションの手段としての役割を果たすことがわかった。動物飼育を効果的に教育に活かせるかどうかは、学校の取り組み次第である。動物飼育を通して、児童へ良い影響を与えることは十分に可能であると言える。先行研究だけでなく、本研究でも、動物を飼育することで児童の心を育むことができると証明した。

３　いのちの教育

これまで山口県の動物飼育状況をベースに、小学校教育における動物飼育の目的、さらには子どもに与える影響の考察を行ってきた。動物飼育をすることによって、子どもの動物を可愛がる心や責任感を育て、いのちを大切に思う気持ちを芽生えさせるなどの教育的効果が得られた。また、実際の学校でも「愛情」「いのち」といった側面から動物飼育が意識されていることがわかった。動物飼育は、情操面の育成に十分な価値が認められると言える。しかし、「いのちの大切さは、動物との触れ合い以外でも教えられる」と考えている学校は本調査で91.1％存在した。さらに、学校で飼育されている動物を教育活動（委員会を除く）に利用している学校は約５割程度であった。実際の教育に動物飼育が活かせていない現状にあることは、隠せない事実である。これらを踏まえた上で、学校動物飼育の現状を改めて見つめ直すため、特に「いのちの教育」に焦点を絞って、動物飼育のあり方を検討していきたいと思う。

「いのちの教育」についてであるが、冒頭でも述べたように、現在ますますの重要性が唱えられている。しかし、「こころの教育」や「いのちの教育」が言われだしたのは、ここ最近の話ではない。昭和33年の学習指導要領では、新たに「道徳」が領域化し、その中に生命を尊ぶことが書かれている。さらに、増澤、廣瀬によると昭和52年の学習指導要領から、生物教材全体の扱いが個々の生物の観察から生命尊重の重視に移行されているとのことである（増澤・廣瀬、2003）。そして、平成元年の「生活科」の新設、平成10年の「生きる力」の提唱によって、学校教育において「いのちの教育」含め「こころの教育」の充実が強みを帯びていった。したがって、従来「いのちの教育」は実践されてきたのである。その教材としては、動物飼育に限らず、さまざまなもので取り上げられている。特に、これまでいのちの大切さを子どもたちに伝えてこなかったわけではない。

それでは、なぜ、なお一層の生命尊重教育が目指されているのであろうか。そのことについて、杉山（2004）は要約すると次のように述べている。これまでの「いのちの教育」は、「生

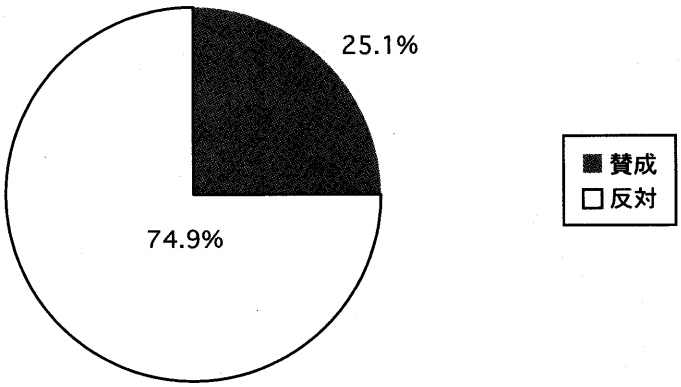
きることのすばらしさ」やその「尊さ、大切さ」等を情緒主義的・道徳主義的に考え教えようとする、言い換えれば「生」の部分にのみ光を当ててきた傾向にあり、その対極にある「死」について考えさせたり、見つめさせる取り組みは弱かった。「否、むしろ避けられてきたのではないかと思われる」(杉山、2004)。また、アルフォンス・デーゲンの言葉を借りていうのであれば、死に対する消極的なイメージから「死のタブー視」が学校、ましてや現代社会に暗に存在するように感じる(DeeKen、2001)。

それでは、「死」で「いのちの教育」を行うことはいけないことなのであろうか。「死ぬ」ことを避けて、本当の意味でいのちの大切さを理解することができるのであろうか。

「いのちの教育」の「死」というテーマに関して、本調査では、「命の大切さを学ぶ授業として、鶏を育てて大きくなったら殺して食べる」という実践を調査票の中にとりあげた。実際に、小学校で動物を「殺して食べる」実践の報告はこれまでされている(黒田, 2003、杉山, 2003、村井, 2001)[1)]。この実践について「賛成」か「反対」かの意見を頂いた。対象を鶏としたのは学校飼育実態から親しみ深い存在であり、この問題について考えやすいと思ったからである。この「鶏を育てて大きくなったら殺して食べる」ことが動物を媒介とした「死」の教育のひとつになり得ることに着目し、現在の学校教育における「いのちの教育」の捉え方を考察する。

調査結果により、「鶏を殺して食べる」実践に「賛成」と答えた人は44校(20.2%)、反対131校(60.1%)、「わからない」もしくは「無回答」は43校(19.7%)であった。また、「わからない」「無回答」の回答を除き、「賛成」と「反対」と2つの明確な態度を示した学校に分けた結果、「賛成」25.1%「反対」74.9%と4分の3の学校が、反対の立場であることがわかった(図1)。

図1　鶏を殺して食べる実践について



次に「賛成」と「反対」の代表的な理由を挙げておく。◎は、回答記述が多かったものである。

「鶏を育てて殺して食べる」実践に対して、全体の約2割の学校が「賛成」の立場を示した。主な賛成理由としては、「命の重さや尊さを、殺して食べるということを通して実感として学べるから」といったものであった。実践をすることによって、普段私たちは他の生物のいのちをいただいて生きているのだという現実を知り、いのちを無駄にしてはいけないという価値観を育てられる。そして、そのことは「いのち」を大切にしようという気持ちを芽生えさせることができると考えられている。鶏を殺すという体験はとても衝撃的である。しかし、だからこ

	理　　由
賛成	◎命の重さ、尊さを貴重な体験を通して、実感として学ぶよい機会になる。 ○命を「いただく」ということについて深く考えられる。 「いただきます」の本当の意味を知る。 ○自分たちで育てた鶏を食べることで、普段食べているのにも命があり、その命をもらって人間は生きていると実感できるから。 ○食べるための動物の存在、現実を直視することも必要。 ○命を大切にする、命を無駄にしないという価値を育てる。 ○「食べる」「生きる」とはどういうことなのか考えられる。 ◎指導に当たっては、相当な準備と配慮が必要。実践する目的を明確にし、中途半端では行えない。
反対	◎小学生の児童には、発達段階上そぐわない。 ◎命の大切さは、他の方法でも学べ、殺してまでする必要はない。 ◎小学校で飼育するのは愛情飼育（愛玩）が基本。愛情をもって育てることで命の大切さを教えたい。 ◎子どもに大きなショックを与えてしまう。心に傷を負わせてしまう可能性があるのであれば行うべきではない。 ○学校飼育は食べる目的で飼っているわけではない。 ○この実践で本当にいのちの大切さを教えられるか疑問。 ○大切に育て、命のぬくもりを手に胸に感じている。愛情かけたものの「生」「ぬくもり」をたつというのは酷だとおもう。 ○話したり、聞いたりする程度の間接的な食育でもショックをうける児童もいるので、実践的な活動、殺すということはショックが大きすぎるし、指導する人間もいやだ。 ○心の教育になるのだろうか。 ○実践後、鶏の肉を食べられなくなる恐れがある。 ○家畜飼育は、今の小学生の生活で日常化されていないので、理解するのが難しいのではないだろうか。 ○命について学ぶことに対して殺して食べるが必要とは思わない。そこまで実行すると、鶏肉の業者や狩りをする人たちの立場にしかたてないと思う。 ○かわいがっていた鶏だから食べてあげましょう、で平気で食べられるのは異常な感じがする。 ○実践しなくても、見学や映像、あるいは話せば理解できる。 ○児童、教員、保護者、地域とも受け入れられない。 ○衛生的な問題。 ○指導する側の準備、指導の問題。 ○内容的には素晴らしい、食べものを大切にするという学びにはつながるとは思う。

そ「食べる」とは何か、「生きる」とはなにか、そして「いのち」とは何か、子どもが真剣に考えることができるのであろう。体験を通して、実感として学ぶことが重視されているようである。もちろん、多くの学校が指摘していたように、徹底した準備と配慮、そして指導が必要不可欠である。

次に、「反対」の立場の意見である。「反対」を示したのは全体の約６割の学校であり、「わからない」「無回答」の立場を除くと約75％と、「賛成」との差はより明確となった。主な反対

理由としては、「全く反対」の立場をとるものと、反対の立場であるが「条件があえば賛成」といった意味合いを含むものがあった。「条件があえば賛成」と受け取れる意見には、「衛生上の問題」や「指導する側の問題」、「素晴らしいとは思うが自分にはできない」という理由があげられた。「いのちの教育」としては認めているようである。しかし、反対意見の中でこの立場はごく少数である。「全く反対」の立場の学校では、「いのちの教育」として認めていない。多くの意見を集めた反対理由としては、「小学生の発達段階上そぐわない」、「他の方法で命の大切さは学べる」、「愛情をもって育てることでいのちの大切さを教えたい」、「ショックが大きい、逆に心に傷をおわせてしまう」といったものである。そして、「全く反対」の理由を分類すると「発達段階」「児童への心理的影響」「愛情飼育の重視」「殺す必要性がない」「受け入れられない」の５つに分けられる。「発達段階」は、発達段階上、小学校では早すぎる、中学高校では考慮の余地があるだろうとのことだった。「児童への心理的影響」は、児童にはショックが大きすぎるという指摘であった。また、鶏の肉を食べられなくなってしまう可能性を有することもあげられた。心を育てるはずの教育が、「殺す」ことで逆に心を傷つけると危険視している。「愛情飼育の重視」では、学校教育では、食べるために動物を飼育しているわけではないので反対であるという意見であった。殺すことではなく、愛情をもって大切に育てることでいのちの大切さを教えたいというものである。「殺す必要性がない」理由は、いのちの大切さは他の方法でも学べる、実践しなくても、見学や映像、話せば理解できるといったものである。また他にも、「大人の考えで、当たり前のことをすべて教え込む必要はない。」とシビアな意見もあげられた。「受け入れられない」というのは、「殺す」ことがもつ残虐性から、児童、教員、保護者、地域の方ともども受け入れられないであろう、教師自身行いたくないと拒否反応を示していた。また、「家畜飼育」的な実践である「鶏を殺して食べる」ことは、今の子どもの生活で日常化されていないので理解が難しいという声も聞かれた。

以上、反対の理由をみてみると、「いのちの教育」というよりは「食育」や「家畜」として「鶏を殺して食べる」実践を受け止めているとうけとれる意見が多かった。そして、児童の発達段階を踏まえ、心理的影響を心配し、教育的効果は得られないと考えているようである。必ずしも、いのちの教育につながるとはみなしていない。反対の立場の学校の多くは「殺して食べる」実践と「学校での動物飼育」は目的が違い、かけ離れているという見解であった。

ここで、別の質問項目により、学校での「死」の捉え方をみてみたい。動物の死が学校においてタブー視されているのではないかとの考えから、「動物の死はショックが大きいので、子どもにあまりよくない」という質問に「あてはまる」「少しあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」で答えてもらった。分析上、「あてはまる」と「少しあてはまる」を合わせて「あてはまる」に、「あまりあてはまらない」「あてはまらない」を合わせて、「あてはまらない」に設定し直している。その結果、「あてはまる」と答えた学校は、全体の19.7％であり、「あてはまらない」と答えた学校は80.3％であった。「動物の死は子どもによくない」とは、考えていないことが明らかとなった。「死」自体は、教育的に悪いとは思っていないようである。しかし、「生きていることでいのちの大切さを教えたい」という主張の「殺して食べる」実践に反対の立場の学校ほど、「動物の死は子どもによくない」と考えていることも明らかとなっている。表６のクロス分析により、有意な差が認められた。賛成の学校は9.1％、反対の学校は23.3％の割合で、「動物の死はショックが大きいので、子どもにあまりよくない」と答えている。反対の学校ほど、「死」に対して少し敏感になっている傾向にあると言える。

また、「動物が死んだ場合、どのように対処していますか」という問いに対し、「すぐに教職

員だけで対応」と答えた学校が、約６割近くに及んでいることからも、学校では、児童に動物の「死」とあまり直面させていないことがわかる。「死」は悪いものであるという意識はあまりないものの、実際には学校教育において取り扱わない傾向にあるのかもしれない。

表６　命の大切さを学ぶ授業と児童の心理的ショックの心配　（%、括弧内は学校数）

		動物の死はショックが大きいので、子どもにあまりよくない。		
		あてはまる	あてはまらない	合　計
鶏を育て殺して食べることについて	賛成	9.1	90.9	100.0（ 44）
	反対	23.3	76.7	100.0（129）
	合計	19.7	80.3	100.0（173）

χ^2=4.169、df＝1、*p＝.041

ところで、ニワトリを殺して食べる授業についての著書『「いのち」を食べる私たち』を書いた村井敦志は本の中で、若い教師ほど「ニワトリを殺して食べる」ことに拒否反応を示したと言っている。このことに関しては、軽く触れただけで特に追究はされていない。少し興味をもったので、本調査でも若い教師ほど拒否反応を示しているのか、クロス分析をしてみた。すると、有意差が認められた（表７）。

村井の所感に反して、本調査では若い年代の教師ほど賛成の立場をとっている。村井の本が発行されたのが2001年で、８年前であることを考慮しても、本調査の結果は、やはり若い教師は賛成、ベテランの教師ほど反対の立場であると言える。その理由はわからないが、興味深い結果であったので紹介した。このことに関しては、本研究ではここでとどめる。

表７　年代と命の大切さを学ぶ授業　（人数、括弧内は%）

		鶏を育て殺して食べることについて		
		賛　成	反　対	合　計
年代	20代	10（ 52.6）	9（ 47.4）	19（100.0）
	30代	8（ 36.4）	14（ 63.6）	22（100.0）
	40代	12（ 19.4）	50（ 80.6）	62（100.0）
	50代	14（ 19.4）	57（ 80.3）	71（100.0）
	60代	0（　.0）	1（100.0）	1（100.0）
	合 計	44（ 25.1）	131（ 74.9）	175（100.0）

χ^2=11.649、df＝4、*p＝.02

以上、「鶏を育て大きくなったら殺して食べる」実践を例に、学校の「いのちの教育」に対する意識をみてきた。山口県の公立小学校では、この実践に対して反対の立場をとるものがほとんどであった。このことから、「殺して食べる」実践は、まだまだ世の中に受け入れられていないことがわかる。殺して死に直面させるよりも、学校では、「生きる」ことに重きを置き、ぬくもりを感じながらいのちの大切さを学ばせたいという思いがあることが明らかとなった。

この考えは、中川も賛同している。食教育に関して中川は次のように述べている。(鳩貝・中川、2003、p.80)

「食教育のために殺すことが時として見られるが、家畜飼育とペット飼育を混合してはならない。ペットは子どもの〈我が子〉と同じである。『子どもの情愛の対象となっている動物を殺してはならない』ということを原則とすべきであろう。」

中川は、小学校の段階においては、愛情をかけてお世話をするペット飼育が大切だとしている。その中で、先行研究で示したような「思いやり」「いのちの大切さ」「責任感」といった動物飼育の意義を唱えている。前述したように、現在の小学校では「愛情飼育」を大きな目的としている。そして、動物の世話をし、育て、生きていることを実感しながら「いのちの教育」を行いたいと考えていることが、本研究で明らかとなった。このことから、導きだされる事実として、学校教育は「生」に注目していることが言える。

また、村井は自らの著書『「いのち」を食べる私たち』で、現在の子どもは、「死」から隔離されているため「死」の解除が必要と説いている(村井、2001)。村井の指摘のように本調査結果からも、6割の学校で動物が死んだらすぐに教職員だけで対処することが明らかとなっている。また、「鶏を殺して食べる」実践を「できない」「したくない」と答える学校も多かった。この「死」を避ける学校の傾向から、児童が「死」から隔離されているだけでなく、学校を運営する教職員の世界でも、死の隔離意識が存在していると解釈できる。大人の世界でも「死」からの隔離は進んでいるのかもしれない。

しかし、「殺して食べる」実践を否定している愛情飼育派の中川は、「死」までも否定しているわけではない。動物を飼育すれば、当然いのちには終わりが来る。「鶏を殺して食べる」ような、こちらが設定した「死」ではなく、生命の営みとして自然にくる「死」は肯定的に「いのちの大切さ」を学ぶ機会として受け止めている。また、『小学校学習指導要領解説生活編』(文部科学省、平成20年、p.36)には、以下のような記述がある。

> 飼育や栽培の過程では，新しい生命の誕生や突然の死などや病気など，生命の尊さを身をもって感じる出来事に直面することもある。成長することの素晴らしさや尊さ，死んだり枯れたり病気になったりしたときの悲しさやつらさ，恐ろしさは，児童の成長に必要な体験である。動植物とのかかわり方を真剣に振り返り，その生命を守っていた自分の存在に児童自らが気付く機会ととらえることが大切である。

ここでも、「死」はひとつの教育の大切な機会と考えられていることがわかる。「鶏を殺して食べる」まではいかなくとも「死」の教育は、学校で取り扱われていくべきという意識はあるようである。表7より、若い教師ほど「鶏を殺して食べる」実践に肯定的であった。このことから、はっきりとしたことは言えないが、「いのちの教育」そして、「死の教育」として、今後の教育現場において広い視野をもって取り組まれることを漠然と予兆しているのかもしれない。現状では、動物の死が学校教育に活かされている、受け入れられているという印象は、今回の調査では受けられなかった。けれども、否定するばかりではなく、教育の可能性として「生」だけではなく、「死」にも目を向けた動物飼育実践を行っていただきたいと思う。

V．まとめと今後の課題

1　まとめ

今回の研究によって、小学校教育における動物飼育の目的としては、「情操教育」や「愛情飼育」、「いのちの飼育」といった価値を多くの学校で見出していることが明らかとなった。動物飼育の有無で分けて考えれば、動物飼育をしている学校ほど「愛情飼育」、していない学校ほど「理科飼育」と見なす傾向にある。動物を飼育することで、子どもと動物が情を交わし、ぬくもりやいのちを学んでいくのであろう。先行研究の中川の調査、さらには著者の調査でも動物飼育をした子どもの変化をみることで、動物飼育が情操的に働くことが分かっている。そして飼育の有無にかかわらず「いのちの飼育」と分類する学校が多かったことは、学校教育全体として動物飼育は「いのちの教育」として関心が高いことを示唆している。

けれども、いのちの教育として「鶏を育て殺して食べる」実践を学校教育で取り上げることに関しては75％の学校が「反対」と否定的態度をとっている。さらに、飼育動物の死亡時の対応として、６割の学校が教職員だけで対処していることも明らかとなった。これらの事実から、学校教育においては、動物の死を避ける傾向にあることが考えられる。学校の動物飼育を通した「いのちの教育」の特徴としては、動物を可愛がり愛情を育むことによっていのちの大切さを児童に教えたいという「生」に注目した「愛情飼育」を重視していることが言える。しかし、動物を飼育している以上「死」は逃れられない。本稿では、中川の著書や学習指導要領で「死」に直面する教育的意義が認められていることからも、学校現場において「生」だけでなく「死」を通した「いのちの教育」提唱した。その中で筆者は、「鶏を殺して食べる」実践も、「死」に注目した「いのち」を考える教育の可能性として、学校教育の思慮に入れられることを望んで、本研究の終末とする。

2　今後の課題

動物飼育が情操教育として意識だけに留まらず実践されることが今後の小学校教育における動物飼育の課題である。そのためには、教育活動の先導者である教職員が飼育している動物を教材として取り上げやすい環境が整われなければいけない。飼育小屋の劣悪な環境、世話の問題、感染症の問題、教職員の動物飼育に関する知識不足など、調査で明らかになった諸問題の解決がまず第一であろう。そして、アンケートでは「忙しい」「利用法がわからない」などといった声も聞こえた。「担当外の先生と協力して行っている学校ほど、飼育担当職員は飼育担当を続けてやりたい、もしくはやってもよい（χ^2=15.765、df＝4、$^{**}p = .003$）」と思う結果が出ていることからも、連携して取り組むことが大切である。飼育担当職員の負担をなくすためだけでなく、動物飼育を学校教育で効果的に行っていくのであれば、学校全体で取り組むことが大切であるだろうし、保護者や地域の方への理解も必要になるのではないだろうか。さらには、動物のことを知るためには、専門家である獣医師会の協力もいるであろう。全国的には、各都道府県獣医師会において学校飼育動物に関する事業やそれに対する行政の支援など、連携体制が整ってきている。しかし、山口県内では家庭、地域、獣医師会との連携は薄く、行政の支援においても連携体制はとられていない。さらに、学校教育において動物飼育が曖昧であることや学習指導要領の影響力が大きいことから、より明確に動物飼育に関する記述を学習指導要領に組み込み、動物飼育の指針を示すことを文部科学省に求めたい。小学校において動物を飼育しやすい体制を整えること、学校だけでなく、県、そして国全体でのますますの連携体制の充実が今後必要であろう。

【注】

1）動物を「殺して食べる」実践例は以下のようなものがある。

1980年、小学校４年生を対象とした「ニワトリを殺して食べる」実践。鳥山敏子先生による。このときは、育てずに廃鶏を利用。1990年から２年半にわたる黒田恭史先生による教育実践、「豚を学級で飼育し、最終的には殺して食べる」。対象は開始当初小学４年生。その他「殺して食べる」にまで実現はされなかったものの、ニワトリを飼育して、解体して食べるという授業が、秋田県の雄物川北小学校や兵庫県西宮市の太田光一先生などで試みられていることを各書が紹介している（杉山，2003、村井，2001）。この場合は、批判の声が周りからあがり、断念にいたったようである。これらの実践は、話題を呼び、賛否両論をうんだ。黒田、鳥山先生らの詳しい実践内容については、参考文献を参照されたい。

主要参考・引用文献一覧

○ Alfons Deeken『生と死の教育』岩波書店，2001
○鳩貝太郎「初等中等教育における生命尊重の心を育む実験観察や飼育の在り方に関する調査研究」科学研究費補助金（基盤研究 C）研究成果報告書，2001
○鳩貝太郎・中川美穂子『教職研修総合特集 No.157　学校飼育動物と生命尊重の指導』教育開発研究会，2003
○黒田恭史『豚のＰちゃんと32人の小学生』，ミネルヴァ書房，2003
○増澤康男・廣瀬由美「学校飼育動物―戦後小学校学習指導要領・教科書にみる位置づけの変遷と現在の課題―」『兵庫教育大学　研究紀要』Vol.24, 2004，第３分冊，pp.95-100
○村井敦志『「いのち」を食べる私たち（ニワトリを殺して食べる授業―「死」からの隔離を解く）』教育史料出版会　2001
○文部科学省『小学校学習指導要領解説生活編』東洋館出版社，2008, p.34
○中川美穂子「獣医師からみた学校飼育動物の意義（動物介在教育）」鳩貝太郎・中川美穂子『教職研修総合特集 No.157　学校飼育動物と生命尊重の指導』教育開発研究会，2003, pp.42-45
○中川美穂子「学校における動物飼育の問題点」鳩貝太郎・中川美穂子『教職研修総合特集 No.157　学校飼育動物と生命尊重の指導』教育開発研究会，2003, pp.78-81
○沖縄県獣医師会「学校飼育動物アンケート」2006
○杉山緑「「いのちの教育」の検討」，山口大学『研究論叢』第54集・第３部、2004, pp. 55-65
○社会法人　日本獣医師会学校飼育動物委員会
「学校飼育動物活動の推進について（活動の経過と事業促進の指針）」2005
○社会法人　日本獣医師会小動物臨床部会学校飼育動物委員会
「子どもの心を育てる学校での動物飼育（学校獣医師制の必要性と活動事例）」2007

参考 URL 一覧

○『うさぎとボーイスカウト浦添３団の部屋～学校うさぎを支援するページ～』
http://www.hpmix.com/home/kaanel/index.htm
○沖縄タイムス、H18／12／22（平成19年11月16日現在）
http://www.hpmix.com/home/kaanel/H181222enquete.pdf
○全国学校飼育動物獣医師連絡協議会『学校飼育を考えるページ』
http://www.vets.ne.jp/~school/pets/